

学位論文要旨

羞恥表出者に対する観察者の行動および評価に関する研究
— 日常場面における観察者の行動生起プロセスの検討 —

広島大学大学院 教育学研究科
教育人間科学専攻

福田 哲也

目次

第 1 章 本研究の背景と目的

- 第 1 節 羞恥表出者に対する観察者の行動および評価の研究の概要
- 第 2 節 先行研究の問題点
- 第 3 節 本研究の目的

第 2 章 羞恥表出者に対する観察者の行動と評価の整理 (研究 1)

- 第 1 節 羞恥表出者に対する観察者の行動と評価の整理

第 3 章 羞恥表出者に対する観察者の行動の生起プロセスの検討 (研究 2)

- 第 1 節 羞恥表出者に対する観察者の行動生起プロセス
- 第 2 節 状況と羞恥表情の組み合わせが観察者の行動に及ぼす影響
(研究 2-1)
- 第 3 節 観察者による評価が観察者の行動に及ぼす影響 (研究 2-2)
- 第 4 節 状況と羞恥表情の組み合わせが観察者による評価に及ぼす影響
(研究 2-3)

第 4 章 総合考察

- 第 1 節 本研究の成果
- 第 2 節 今後の課題

第 1 章 本研究の背景と目的

第 1 節 羞恥表出者に対する観察者の行動および評価の研究の概要

羞恥は、社会的に受け入れられない自己像や他者に馴染みのない自己像が露呈した時など自身が望まない苦境に置かれたことを意識した際に生じる感情である。羞恥に関する日本での研究は主に羞恥を経験した個人に焦点を当て、羞恥の発生状況、羞恥の発生因、羞恥感情の構造、羞恥を感じた人の対処行動という 4 領域から研究されてきた (樋口, 2004, 2009)。

しかし、感情には経験という側面だけでなく、表出という側面があり (Keltner & Haidt, 1999)、感情の表出は対人関係に関わる機能をもつことが指摘されている (Campos, Campos, & Barrett, 1989)。羞恥感情の表出に関しては、主に表情による表出が検討に用いられ、その機能として無表情が示された時と異なる行動や評価を周囲の人物 (観察者) から引き出すことが先行研究において指摘され (e.g., Keltner & Buswell, 1997)、実証されてきた。例えば、観察者の行動に関しては、信頼ゲームを用いた研究により、ゲーム相手が示す表情が羞恥表情か無表情かによって観察者の資源分配行動が変化することが示されている (Dijk, Koenig, Ketelaar, & de Jong, 2011; Feinberg, Willer, & Keltner, 2012, Study 4, Study 5)。また観察者からの評価に関しても、相手が羞恥表情か無表情を示しているかによって観察者からのポジティブさの評価 (Dijk, de Jong, & Peters, 2009, Experiment 2, Dijk et al., 2011) や向社会性の評価 (Feinberg et al., 2012, Study 3, Study 4) が異なることなどが示されている。

こうした羞恥表出者に対する観察者の行動や評価は、感情の適応的な機能として得られる 2 つの利益と関連づけることができ、人が社会生活

を送るうえで重要な役割を果たす。Keltner & Gross (1999) によると、感情がもたらす利益には近接的な利益と遠位的な利益の 2 つがある。近接的な利益とは個人の生理状態や社会的環境の改善に関わるものであり、遠位的な利益とは生存率を高めることに関わるものである。社会的な苦境場面である羞恥場面において、観察者の行動は表出者の状態や環境を改善させる可能性を持つ。しかし、もし表出者がネガティブな人物だと評価されてしまうと、表出者は観察者から援助行動のような表出者の状態や環境を改善する行動を受けられない可能性や観察者からの攻撃を受ける可能性もある。その場合、表出者の状態や周囲の環境は改善されず、結果として表出者の生存率は低下するだろう。これらのことから羞恥表出者に対する観察者の行動や評価の検討は羞恥感情と個人の適応との関わりを示すことになる。

第 2 節 先行研究の問題点

これまで述べてきたように、羞恥の表出により引き出される観察者の行動や評価は個人の適応に関わる。しかしながらこれらは欧米圏での研究であり、日本において羞恥表出の効果を扱った研究はほとんどない。

さらに欧米圏の研究においても日常場面において羞恥表出が観察者からどういった行動や評価を引き出すのかについては明らかになっていない。観察者の行動に関して、羞恥表出の効果を検討する際に用いられてきた行動は信頼ゲームでの資源分配行動であった。日常場面で観察者が羞恥表出者にとる行動を整理しようとした先行研究 (e.g., Metts & Cupach, 1989) もあるものの、それらは研究参加者に過去の羞恥経験を想起させ、周囲の人物の言語的・非言語的反応を収集するという方法を用いていた。そのため、記憶に残りやすい場面での行動しか収集できないという方法論上の問題点が存在する。

観察者の評価に関する先行研究では、表出者の人物像全体としてのパーソナリティの評価が主な検討対象となっていた。観察者の評価に関しては、パーソナリティに対する評価だけでなく、表出者の一時的な状態に対する評価、すなわち心的状態の推測も存在する。Dijk et al. (2011)からは、心的状態の推測は観察者の行動に影響を及ぼす可能性が指摘できる。そのため、観察者の評価に関してはこの2側面を扱う必要があるだろう。しかしながら、観察者の評価のどちらの側面についても、先行研究では設定された項目に対して観察者が回答しているだけであり、日常場面で観察者が羞恥表出者に行う評価は整理されているとは言えない。

また羞恥表出によって観察者からの評価が変わり、その評価に基づいて観察者は表出者への行動を含めた働きかけを決定すると考えられる。羞恥表出によって表出者自身が最終的に何を得るのかという点を考える場合、日常場面で観察者のとる行動が何によって決まるのかを明らかにすることが必要であろう。しかしながら、日常場面における観察者の行動や評価が十分に整理されていないため、その生起プロセスも明らかになっていないと言えない。

なお、このような羞恥表出によって引き出される観察者の行動や評価を明らかにするためには、表出者の示す表情の種類を考慮することが必要だと考えられる。これまで紹介してきた羞恥表出の効果を検討したほとんどの先行研究では、羞恥表情の種類、すなわちどのような羞恥表出なのかについては考慮されてこなかった。しかしながら羞恥表情に笑いが含まれるかどうかによって観察者からの評価は変化する (Edelmann, 1982)。つまり、表出者の示す表情によって観察者から引き出される評価が異なる可能性がある。そのため、観察者の行動や評価を整理する際には、羞恥表情の種類を考慮した検討が必要である。

第3節 本研究の目的

第2節で述べた問題点を踏まえ、本研究では、日常場面での羞恥表出者に対する観察者の行動および評価の整理、さらに観察者の行動の生起プロセスを明らかにすることを目的とする。また日常場面での観察者の行動や評価に対する羞恥表出の効果を検討し、羞恥表出の社会的機能の解明についても試みる。

なお本研究では羞恥表出として、多くの先行研究と同様に、羞恥表情を扱う。具体的には、菅原（1998）が示した3つの羞恥表情と同じ特徴を持つ表情に自作の無表情を加えた合計4表情を用いる（Figure 1）。菅原（1992, 1998）は、羞恥は社会的に受け入れられない自己像が露呈した時に生じるハジと他者に馴染みのない自己像が露呈した時に生じるテレの2つの感覚から構成されると述べており、3つの羞恥表情は、ハジとテレおよびその両方の感覚に当てはまると観察者が判断した典型的な特徴を組み合わせて作成されている（菅原, 1994, 1998）。そのため、これらは羞恥の全体像を示す上で適切な表情だと言える。

第2章 羞恥表出者に対する観察者の行動と評価の整理(研究1)

第1節 羞恥表出者に対する観察者の行動と評価の整理

目的 羞恥表出者に対する観察者の行動と評価を収集・整理する。

予備調査 大学生・大学院生 21名（男性 10名，女性 11名：平均年齢 24.14歳）に質問紙調査を行った。回答者には、羞恥状況と表情を組み合わせたシナリオを示した。用いた羞恥状況は、羞恥状況を整理した

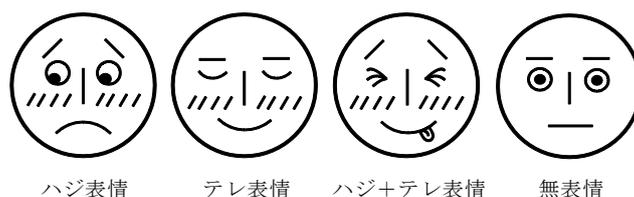


Figure 1. 3つの羞恥表情（菅原, 1998）と本研究で作成した無表情

樋口（2000）の研究から公恥，照れ，性的，対人緊張，対人困惑という5つを選んだ。表情は，Figure 1で示したハジとテレおよびその両方の感覚を読み取れると観察者に判断された3つの羞恥表情（菅原，1998）に自作の無表情を加えた計4つであった。回答者ごとに呈示された状況は異なっていた。各回答者は，状況は同じだが表情の異なる4つの場面において，表出者（＝友人）に対するパーソナリティ評価や心的状態の推測，自身の行動について自由記述で答えた。得られた記述をKJ法（川喜田，1967）の手続きを参考に分類した結果，パーソナリティ評価は12，心的状態の推測は19，行動は11のカテゴリに分かれた。

方法 大学生368名に質問紙調査を行った。回答者には，心理的距離が中程度の友人が駅で転び，特定の表情を示すというシナリオを示した。友人の表情は予備調査と同じ4つで回答者により異なっていた。回答者には，友人のパーソナリティ，心的状態，自身の行動に関する項目に“1. あてはまらない” — “5. あてはまる”で回答を求めた。質問項目は予備調査を基に作成された。分析対象者は，回答に不備がある人などを除いた302名（男性155名，女性147名；平均年齢19.49歳）であった。

結果と考察 観察者の行動，パーソナリティ評価，心的状態の推測ごとに全条件を対象に探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った結果，観察者の行動は4因子，パーソナリティ評価は4因子，心的状態の推測は5因子が得られた（Table 1）。本研究で用いた人前で失敗するという状況は，羞恥状況の中でも報告頻度の多い典型的な羞恥状況だ

Table 1
研究1で得られた各因子および項目例

パーソナリティ評価		心的状態の推測		観察者の行動	
因子名	項目例	因子名	項目例	因子名	項目例
表出性	恥ずかしがり屋だ	困惑	戸惑っている	援助	なぐさめる
社交性	社交的な人だ	不可解	考えがわからない	放置	自分だけその場から離れる
利己性	わがままな人だ	可笑しさ	笑いをとろうとしている	ユーモア化	からかう
消極性	大人しい人だ	満足	嬉しく思っている	観察	周りの人の顔を見る
		怒り	イライラしている		

と言われている（樋口, 2009）。そのため、この状況での回答者の反応パターンに基づいて得られた観察者の行動、パーソナリティ評価、心的状態の推測は、観察者がとる典型的な行動や評価だと考えることができる。

第 3 章 羞恥表出者に対する観察者の行動生起プロセスの検討(研究 2)

第 1 節 羞恥表出者に対する観察者の行動生起プロセス

第 2 章において、羞恥表出者に対して観察者が日常場面でとる典型的な行動や評価が明らかとなった。第 3 章では、こうした観察者の行動が生起するまでのプロセスについて検討を行う。

先行研究から羞恥状況と表出者の表情の組み合わせ、観察者による表出者へのパーソナリティおよび状態に対する評価の 2 つが観察者の行動に影響すること、また状況と表情の組み合わせは観察者による表出者への評価にも影響することが示唆されている（Figure 2）。以降からは Figure 2 に示した関係について、先行研究を紹介しつつ説明を行う。

まず、(1) 観察者の行動に状況と表情の組み合わせが影響することは、Feinberg et al. (2012, Study 5) と Dijk et al. (2011) を比較することからわかる。これらは信頼ゲームを用い、羞恥表出者と無表情の人物への観察者の資源分配量を比較した研究であった。表出者が課題成績を褒められるという状況で羞恥表出を行った Feinberg et al. (2012, Study 5) では、羞恥表出者は無表情の人物よりも資源を得た。一方、囚人のジレンマゲームにおいて表出者が観察者に非協力を選択した状況を用いた

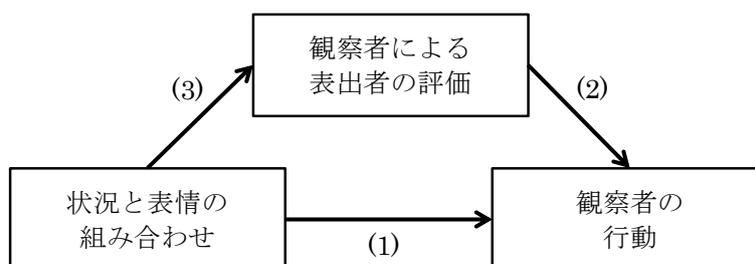


Figure 2. 観察者の行動生起プロセス

Dijk et al. (2011) では、無表情の人物の方が羞恥表出者よりも資源を得た。同様の表出でも状況によりその効果が異なることから、観察者の行動には状況と表情の組み合わせが影響していると言える。

次に(2) 観察者の行動に表出者へのパーソナリティ評価や状態に対する評価が影響することは、Feinberg et al. (2012, Study 4) と Dijk et al. (2011) からわかる。Feinberg et al. (2012, Study 4) は、観察者による表出者への向社会性評価が高いほど資源分配行動が促進されることを示した。つまり、観察者による表出者へのパーソナリティ評価が行動に影響すると言える。また Dijk et al. (2011) で、観察者は羞恥表出者から読み取れる感情について評定を求められた際、羞恥だけでなく、楽しさという感情についても高く評価していた。こうした評価が行われたため、観察者は羞恥表出者への資源分配行動を抑制した可能性がある。これは観察者による心的状態の推測が行動に影響する可能性を示している。こうした研究から、表出者に対するパーソナリティ評価や心的状態の推測は観察者の行動に影響する可能性が高いとまとめることができる。

さらに、(3) 観察者による表出者への評価が状況と表情の組み合わせの影響を受けることは Dijk et al. (2009, Experiment 2) と Dijk et al. (2011) の研究を比較することからわかる。これらは、羞恥表出者と無表情の人物のポジティブさに対する観察者からの評価を比較した研究であった。観察者からのポジティブさ評価は、表出者が失敗した状況を用いた Dijk et al. (2009, Experiment 2) では羞恥表出者の方が高かったが、表出者が囚人のジレンマゲームにおいて観察者に非協力を選択した状況を用いた Dijk et al. (2011) では無表情の人物の方が高かった。同様の表出でも状況によりその効果が異なることから、状況と表情の組み合わせは、観察者の評価に影響すると考えられる。

しかし、Figure 2 で示した行動の生起プロセスは信頼ゲームなどのゲーム場面で得られた知見をもとに提案したプロセスであり、日常場面での行動に適用できるかは定かではない。そこで研究 2 では、3 つの研究を通して、研究 1 で整理された観察者の行動や評価を用い、Figure 2 のプロセスによって観察者の行動が生起するのかを探索的に検討する。

またこれまで紹介してきた先行研究を踏まえると、観察者の行動や評価に対する羞恥表出の効果は状況によって変動することがわかる。そこで研究 2 では、観察者の行動や評価に対する表情の効果の検討および表情間比較を状況別で行い、羞恥表出の社会的な機能の解明も試みる。

第 2 節 状況と羞恥表情の組み合わせが観察者の行動に及ぼす影響（研究 2-1）

目的 状況と表情の組み合わせが観察者の行動に及ぼす影響を検討する。

方法 大学生 330 名に質問紙調査を行った。心理的距離が中程度の友人が発表に対する先生からのコメントを人前で受け、特定の表情を示すというシナリオを調査に用いた。コメントは、発表への否定的な評価（否定状況）か、肯定的な評価（肯定状況）のどちらかであった。この 2 つの羞恥状況は、羞恥は周囲の他者に否定的または肯定的な印象を与えたと感じた時に生じるという菅原（1998）の羞恥状況の分類に基づいている。また、友人の表情は Figure 1 に示した 4 種類であった。各回答者には、状況と表情を組み合わせた 8 種類のシナリオのいずれかを呈示した。回答者は研究 1 で得られた観察者の行動、パーソナリティ評価、心的状態の推測の各因子の負荷量上位 3 項目に答えた。各変数の構成項目に 2 項目以上不備のある人などを除外し、312 名（男性 82 名、女性 230 名；平均年齢 20.16 歳）を分析対象者とした。

結果と考察 観察者の各行動 (Table 2) を従属変数、状況と表情を独立変数とした 2 要因分散分析を行った結果、状況と表情の組み合わせの効果、すなわち交互作用は援助とユーモア化において有意であった (Table 3)。こうした結果から、表出者の気を紛らわせる、なぐさめるといった項目から構成される援助や、表出者をからかう、茶化すといった項目から構成されるユーモア化は、状況と表情の組み合わせから有意な影響を受けることが示された。さらに各状況での表情の単純主効果の検定および単純主効果の多重比較を行った。その結果、肯定状況での援助 ($F(3, 304) = 2.760, p = .042, \eta^2 = .020$) と否定状況でのユーモア化 ($F(3, 304) = 14.162, p < .001, \eta^2 = .114$) に表情の単純主効果が有意であったが、多重比較においては否定状況でのユーモア化においてのみ表情間に有意差がみられた ($\alpha = .05$)。ユーモア化は全体的に平均値は高くないものの、ハジ+テレ表情は他の表情より有意に得点が高く、テレ表情はハジ表情よりも有意に得点が高かった。無表情は、ハジ+テレ表情との間にのみ有意差がみられた。ユーモア化を構成するから

Table 2
状況表情別観察者の行動の平均値(SD)

状況	表情	援助	放置	ユーモア化	観察
否定	ハジ	2.81 (1.08)	2.78 (1.08)	1.24 (0.40)	3.49 (1.18)
	テレ	3.18 (1.02)	2.50 (1.06)	1.85 (0.88)	3.78 (1.10)
	ハジ+テレ	3.08 (1.08)	2.62 (1.08)	2.49 (1.08)	3.57 (1.09)
	無表情	3.09 (0.92)	2.37 (1.03)	1.54 (0.89)	3.91 (0.97)
肯定	ハジ	2.32 (0.85)	2.27 (1.15)	2.20 (0.93)	3.15 (1.31)
	テレ	1.92 (0.65)	2.61 (1.03)	2.32 (0.90)	3.17 (1.24)
	ハジ+テレ	1.78 (0.54)	2.60 (1.19)	2.48 (1.00)	3.25 (1.29)
	無表情	2.21 (0.90)	2.76 (1.14)	2.07 (0.98)	3.54 (1.36)

注) 回答は“1. あてはまらない” — “5. あてはまる”の5段階

Table 3
観察者の行動を従属変数とした2要因分散分析

	状況の主効果 ($df = 1/304$)			表情の主効果 ($df = 3/304$)			交互作用 ($df = 3/304$)			adjusted R^2
	F値	p値	η^2	F値	p値	η^2	F値	p値	η^2	
援助	90.849	.000	.224	0.692	.557	.005	3.422	.018	.025	.233
放置	0.006	.938	.000	0.072	.975	.001	2.337	.074	.023	.001
ユーモア化	23.173	.000	.062	11.135	.000	.090	3.776	.011	.030	.166
観察	9.034	.003	.028	1.597	.190	.015	0.276	.843	.003	.025

Table 4

状況表情別パーソナリティ評価の平均値(*SD*)

状況	表情	表出性	社交性	利己性	消極性
否定	ハジ	3.31 (0.93)	1.95 (0.66)	1.43 (0.46)	3.48 (0.71)
	テレ	3.76 (0.77)	2.65 (0.78)	1.46 (0.57)	3.29 (0.70)
	ハジ+テレ	3.05 (0.85)	3.87 (0.71)	1.83 (0.62)	2.01 (0.71)
	無表情	2.21 (0.77)	1.76 (0.61)	1.80 (0.76)	2.92 (0.75)
肯定	ハジ	4.34 (0.62)	2.02 (0.52)	1.38 (0.55)	3.93 (0.52)
	テレ	4.22 (0.64)	2.48 (0.67)	1.34 (0.51)	3.74 (0.61)
	ハジ+テレ	4.33 (0.49)	3.20 (0.85)	1.75 (0.79)	2.91 (0.81)
	無表情	2.90 (0.91)	1.60 (0.55)	2.19 (0.96)	3.79 (0.89)

注) 回答は“1. あてはまらない” — “5. あてはまる”の5段階

Table 5

状況表情別心的状態の推測の平均値(*SD*)

状況	表情	困惑	不可解	可笑しさ	満足	怒り
否定	ハジ	4.23 (0.47)	2.18 (0.98)	1.10 (0.30)	1.12 (0.30)	2.19 (0.94)
	テレ	3.74 (0.75)	3.04 (1.17)	1.75 (0.88)	1.72 (0.85)	2.15 (1.04)
	ハジ+テレ	3.30 (0.97)	2.94 (1.10)	3.01 (1.08)	1.53 (0.66)	1.86 (0.92)
	無表情	3.48 (0.95)	3.09 (1.35)	1.30 (0.42)	1.15 (0.37)	3.25 (0.95)
肯定	ハジ	3.76 (0.85)	2.30 (1.08)	1.22 (0.33)	3.36 (0.82)	1.28 (0.40)
	テレ	2.59 (0.87)	1.68 (0.76)	1.46 (0.57)	4.39 (0.50)	1.11 (0.26)
	ハジ+テレ	2.65 (0.95)	1.67 (0.77)	1.87 (0.82)	4.37 (0.52)	1.08 (0.18)
	無表情	3.58 (0.75)	3.91 (1.08)	1.32 (0.48)	2.34 (1.09)	2.05 (1.17)

注) 回答は“1. あてはまらない” — “5. あてはまる”の5段階

かいや茶化しは、攻撃的ユーモア表出に分類され、攻撃性から正の影響を受けること（塚脇・樋口・深田，2009）やその動機の1つとして相手への苛立ちを気付かせるためといったものが指摘されている（塚脇・越・樋口・深田，2009）。そのため、ユーモア化は攻撃としての側面を持つ可能性があり、この結果は、否定状況では表出者の表情により観察者からの攻撃の程度が変化すると解釈することもできる。以降、状況と表情の交互作用が有意な観察者の行動のうち、否定状況での羞恥表出の効果が顕著であったユーモア化に注目し、結果の報告を行う。

次に観察者の行動に対する状況と表情の組み合わせの効果が評価を介しているのかを検討するため、パーソナリティ評価（Table 4）または心的状態の推測（Table 5）を共変量とした共分散分析をそれぞれ行った。共変量は回帰の平行性、有意性の検定に基づいて決定した。パーソナリティ評価の社交性と利己性を共変量とした分析の結果、ユーモア化への

状況と表情の交互作用の効果は有意傾向であった ($F(3, 302) = 2.557$, $p = .055$, $\eta^2 = .019$, adjusted $R^2 = .232$)。また、心的状態の推測の可笑しさと満足を共変量とした分析の結果、ユーモア化への交互作用の効果はみられなかった ($F(3, 302) = 1.038$, $p = .376$, $\eta^2 = .007$, adjusted $R^2 = .335$)。社交性や利己性、可笑しさと満足を考慮した共分散分析の結果、ユーモア化への交互作用効果が有意から有意傾向または非有意に変化し、ユーモア化に対する交互作用の効果量 η^2 も.011 または.023 減少した。同様に、ユーモア化の R^2 値が.066 または.169 増加した。社交性や利己性、可笑しさと満足を考慮することで、ユーモア化に対する状況と表情の組み合わせの効果が弱まり、さらにユーモア化の説明率が上昇していることから、ユーモア化への状況と表情の組み合わせの効果は評価を媒介している可能性が高いと言える。以降、評価に関しては、ユーモア化の共変量に用いた 4 つについてのみ報告を行う。

第 3 節 観察者による評価が観察者の行動に及ぼす影響 (研究 2-2)

目的 羞恥表出者に対する観察者のパーソナリティ評価および心的状態の推測が観察者の行動に影響するのかを検討する。

方法 調査対象者、内容、分析対象者は研究 2-1 と同じであった。

結果と考察 観察者の各行動 (Table 2) を目的変数、各パーソナリティ評価 (Table 4) または各心的状態の推測 (Table 5) を説明変数とした共分散構造分析をそれぞれ行った。その際、状況と表情、それらの交互作用項を統制変数とした。また、モデル内の有意または有意傾向でないパスを除外し、モデルの修正を行った。パーソナリティ評価を説明変数とした分析の最終モデル ($GFI = .946$, $CFI = .934$, $AGFI = .859$, $RMSEA = .080$) においては、社交性 ($\beta = .342$) と利己性 ($\beta = .143$) のパスが、心的状態の推測を説明変数とした分析の最終モデル (GFI

= .942, CFI = .942, AGFI = .857, RMSEA = .078) においては、可笑しさ ($\beta = .447$) と満足 ($\beta = .354$) のパスがそれぞれユーモア化に有意であった ($ps < .01$)。従って、ユーモア化の共変量に用いた評価はユーモア化に影響することが示された。

第4節 状況と羞恥表情の組み合わせが観察者による評価に及ぼす影響 (研究 2-3)

目的 状況と表情の組み合わせが観察者による表出者への評価に影響するのかを検討する。

方法 調査対象者、内容、分析対象者は研究 2-1 と同じであった。

結果と考察 状況と表情を独立変数、各パーソナリティ評価 (Table 4) および各心的状態の推測 (Table 5) を従属変数とした 2 要因分散分析を行った。その結果、パーソナリティ評価における社交性 ($F(3, 304) = 4.033, p = .008, \eta^2 = .018$)、利己性 ($F(3, 304) = 2.372, p = .070, \eta^2 = .020$)、心的状態の推測における可笑しさ ($F(3, 304) = 13.708, p < .001, \eta^2 = .076$)、満足 ($F(3, 304) = 21.970, p < .001, \eta^2 = .049$) に対して交互作用が有意もしくは有意傾向であった。よって、こうした評価は状況と表情の組み合わせから影響を受けることが示された。

第4章 総合考察

第1節 本研究の成果

本研究では、研究 1 において、日常場面において観察者が羞恥表出者にとる典型的な行動や評価の整理を行った。次に研究 2 では、そうした日常場面における観察者の行動の生起プロセスについて検討を行った。その結果、日常場面でとる観察者の行動のうち、否定状況における羞恥表出の効果が顕著であったユーモア化の生起プロセスが明らかとなった。研究 2 で、状況と表情の組み合わせの効果はユーモア化に有意であった。

その媒介変数として社交性や利己性，可笑しさや満足といった評価を仮定した結果，状況と表情の組み合わせの効果量 (η^2) は減少し，有意であった効果が有意傾向または非有意となった。さらにユーモア化の説明率 (R^2) が増加した。また，社交性，利己性，可笑しさ，満足はユーモア化に有意な影響を与えること，状況と表情の組み合わせからの影響が有意または有意傾向であることが示された。そのため，ユーモア化に対する状況と表情の組み合わせの効果は，Figure 2 で示したように評価を媒介している可能性が高い。

さらにこのユーモア化に関しては，否定状況においては表出者の表情によって行われる程度が異なっていた。先述のようにユーモア化が観察者からの攻撃としての側面をもつ可能性を踏まえると，羞恥表出は表情によるものの攻撃回避の機能を持つ可能性が示されたと言える。

第 2 節 今後の課題

まず挙げられる点は，本研究で用いた表情の弁別に関する問題である。本要旨では記載しなかったが，本研究で用いた各表情から観察者は想定通りにハジとテレの感覚を読み取っておらず，読み取れる感覚という観点から見た場合，同じ感情だとみなされた表情も存在していた。そのため，本研究で生じた行動や評価に対する表情間の違いが表情から読み取れる感情以外の何によって生じたのかを明らかにする必要があるだろう。

また本研究で得られた知見は，表出者と観察者の心理的距離が中程度の友人という条件で得られたものであった。したがって，本研究で得られた知見が，表出者と観察者の心理的距離や関係性が異なっても適用できるのかを検討することが必要であろう。

次に挙げられる点は，本研究で整理された観察者の行動の 1 つである援助の生起プロセスについてである。本研究では日常場面において観察

者がとる行動のうち、ユーモア化に関してはその生起プロセスを示した。また本要旨に記載しなかったものの放置、観察に関しては、研究 2-2 の結果、それらを促進・抑制する評価が明らかとなり、部分的にその生起プロセスが示されたと言える。一方、援助に関しては、状況と表情の組み合わせが影響することが示されたものの、日常場面で生じる評価という心理的変数では、援助を説明することができなかった。援助を説明する心理的変数を明らかにすることが今後の課題の 1 つだと言えるだろう。

最後に挙げられる点は、本研究で示された観察者の各行動がとられた際に各行動が表出者に与える影響を検討することである。この点を検討することによって、羞恥表出が表出者に何をもたらすのかという羞恥表出の機能をより詳細に理解することにつながると考えられる。

引用文献

- Campos, J. J., Campos, R. G., & Barrett, K. C. (1989). Emergent themes in the study of emotional development and emotion regulation. *Developmental Psychology*, **25**, 394-402.
- Dijk, C., de Jong, P. J., & Peters, M. L. (2009). The remedial value of blushing in the context of transgressions and mishaps. *Emotion*, **9**, 287-291.
- Dijk, C., Koenig, B., Ketelaar, T., & de Jong, P. J. (2011). Saved by the blush: Being trusted despite defecting. *Emotion*, **11**, 313-319.
- Edelmann, R. J. (1982). The effect of embarrassed reactions upon others. *Australian Journal of Psychology*, **34**, 359-367.
- Feinberg, M., Willer, R., & Keltner, D. (2012). Flustered and faithful: Embarrassment as a signal of prosociality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **102**, 81-97.

- 樋口匡貴 (2000). 恥の構造に関する研究 社会心理学研究, **16**, 103-113.
- 樋口匡貴 (2004). 恥の発生—対処過程に関する社会心理学的研究 北大路書房
- 樋口匡貴 (2009). 恥—その多様な感情の発生から対処まで 有光興記・菊池章夫(編) 自己意識的感情の心理学 北大路書房 pp.126-141.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために 中央公論社
- Keltner, D., & Buswell, B. N. (1997). Embarrassment: Its distinct form and appeasement functions. *Psychological Bulletin*, **122**, 250-270.
- Keltner, D., & Gross, J. J. (1999). Functional accounts of emotions. *Cognition & Emotion*, **13**, 467-480.
- Keltner, D., & Haidt, J. (1999). Social functions of emotions at four levels of analysis. *Cognition and Emotion*, **13**, 505-521.
- Metts, S., & Cupach, W. R. (1989). Situational influence on the use of remedial strategies in embarrassing predicaments. *Communication Monographs*, **56**, 151-162.
- 菅原健介 (1992). 対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究, **7**, 19-28.
- 菅原健介 (1994). 羞恥表情の構造に関する研究 日本心理学会第 58 回大会発表論文集, 103.
- 菅原健介 (1998). 人はなぜ恥ずかしがるのか：羞恥と自己イメージの社会心理学 サイエンス社
- 塚脇涼太・樋口匡貴・深田博己 (2009). ユーモア表出と自己受容, 攻撃性, 愛他性との関係 心理学研究, **80**, 339-344.
- 塚脇涼太・越 良子・樋口匡貴・深田博己 (2009). なぜ人はユーモアを

感じさせる言動をとるのか？—ユーモア表出動機の検討— 心理学
研究, **80**, 397-404.